

## 柳川先生と冷凍冷蔵庫

野村文子

(昭和46年修士修了)

ボーナスの時期が近づき、テレビのコマーシャルやデパートの商戦がたけなわになるにつれて思いつくことがある。「凍るようで凍らない」とか「パーシャル」等々、最近の冷凍冷蔵庫の改良・発展には目覚ましいものがある。柳川先生にまつわるエピソードは、この冷凍冷蔵庫が主人公。

私が修士課程に入った頃のことだから、一体、今から何年前になるのだろうか。(もちろん数えてみれば、すぐわかることなのだが……)。その頃、私は武蔵境の清本さんという家の二階に下宿しており、奨学金とアルバイトの細々した生活の中で勉学への情熱に燃えていたものである。今でこそ津田塾出身者と言えは眉をひそめられる存在であるが(理由は定かではないが)当時は初めてということもあり、珍しがられて皆さんから親切にしていた。

当時から「生協」と呼ばれる大きい店があり、安いので、よく利用していた。ある日、何げなく電気製品のコーナーを歩いているとたくさんの新製品の中に流行りたての冷凍冷蔵庫がピカピカと輝いていた。値段は高かったが月賦払いにしてくれるという。但し、「確かな保証人さえあれば。」そこで私は考えた。「確かな人」とは一体、だれか? 指導教官をおいて他にない。女子大卒業したての22~23才の私にしては良い思いつきと思わ

れた。(現在の私を想像してはならない。あくまでも、その年頃でなくてはおもしろくない。) それを告げた時の生協の係員のあきれかえった表情は今も忘れられない。指導教官を保証人にして冷凍冷蔵庫を買った学生は初めてだという。いいではないか。必ず何事にも初めがあるのだから。

さっそく柳川先生にミーティングを申し込んだ。先生は手帳を出して時間のやりくりをして下さった。もちろん、修士論文の相談だと誤解して。それはそうだ。先生は当時、テーマについて厳しいチェックをされ、やさしい口調ではあったが鋭い指摘で学生を震え上がらせ、何度も書き直しを命ぜられたものだった。ミーティングは3分で終了。保証人欄にサインして印鑑を押すだけなのだから。先生は私の頼みに一瞬も動ぜられることなく、「これでいいかな」とサインをして、印鑑を引き出しから出して押された。私がお金を払わず自分が払うという可能性など全く考えられなかったようだった。それが、うれしかった。(もちろん、私はキッチンと支払いましたから。念のため)

霜取りをすると下の方が水びたしになるし、電気を喰うし、デザインが古いし、……新しい型の冷蔵庫を見るたびに何度も買い換えようと思った。しかし、できなかった。他の家具が新しくなり、住む家も何度となく変わったが、この冷凍冷蔵庫

だけは昔のままである。研究に志し、高い理想を秘めて宗教学科に入学した昔の自分を思い出して、現在の怠惰を戒めるためもある。宗教の研究とは人間の心の研究であることを、厳しさと笑顔と、

卓越した頭脳の冴えで教えて下さった柳川先生のことを忘れないためでもある。私を信頼して快く保証人になって下さった柳川先生、いつまでもお元気で。